



オオシラビソに魅せられたプラントハンター

東北公益文科大学 教授 遠山 茂樹

1877（明治10）年5月、ひとりの英国人が横浜から陸路、北海道をめざした。男の名はチャールズ・マリーズ。当時、英国の園芸界をリードしていた園芸商・ヴィーチ商会の派遣したプラントハンター（植物の狩人）である。時あたかも西南戦争の真っ只中で、横浜～函館間の汽船が運休していたため、徒歩での旅を余儀なくされた。横浜を出て、日光、仙台、そして盛岡を経て、二週間かけ、やっとの思いで青森に到着した。

しかし、津軽海峡を渡り函館まで行くのに、数日間待たなければならなかった。その間、青森の街を散策していたマリーズは、ある珍しい針葉樹に目をとめた。すぐさまその群生地を聞きただし、八甲田山に向かった。激しい雷雨の中、終日歩きまわり、多数の蛇や二頭の熊にも遭遇したというのであるから、決して楽な山行ではなかったことは確かである。そして、ついに求めていた針葉樹、すなわちオオシラビソ（別名アオモリトドマツ）をさがしあて、その球果を手に入れた。

当時、英国ではシダ植物ならびに針葉樹ブームがまきおこっていた。珍種のシダをテラリウムと呼ばれる小型のガラスケースに入れ、室内で栽培・観賞することは、中流階級のステイタス・シンボルともなった。1845年、ガラス税の廃止がそれに拍車をかけた。ガラスは鉄と同様、産業革命によってはじめて大量生産が可能となるが、一般家庭に普及するのは19世紀半ば以降のことである。テラリウムおよびアクアリウム（家庭用小型水槽）の流行はそれを反映している。

一方、針葉樹ブームの火付け役となったのは、ダグラス・モミであった。‘針葉樹の王様’といわれるこの樹木は1827年、スコットランド人のプラントハンター、デイヴィッド・ダグラスによってアメリカ西部のオレゴン州から英国にもたらされ、19世紀後半に各地で植林された。

また、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公は1840年、クリスマスを祝うため、祖国ドイツからウィンザー宮にクリスマス・ツリーを持ち込んだ。それが1848年12月『絵入りロンドン・ニュース』

に挿絵入りで紹介され、英国人は初めてクリスマス・ツリーを飾る習慣を知ることになる。19世紀後半には、この習慣は広く一般家庭にも浸透していった。こうしたクリスマス・ツリー普及の背景には、針葉樹ブームがあったのである。

古来、英国人は常緑の針葉樹を愛好してきた。もともと自生の植物が少なく、冬の寒さが厳しいブリテン島では、冬でも「緑」をたやさない常緑樹がことのほか好まれたのである。常緑樹が永遠の生命の象徴とされたのも、容易に察しがつく。常緑で寿命も長いイチイの木が教会に植え込まれたのは、そのためである。

ところで、冬の蔵王といえば樹氷であろう。樹氷ができるのは常緑の針葉樹だけで、落葉広葉樹にはできない。蔵王でも八甲田山でも、樹氷は実際にはオオシラビソにできる。オオシラビソの学名は *Abies mariesii* であるが、*Abies* は属名で、モミ属の謂である。そして、そのあとに付されている種小名に「発見」者マリーズの名がみえる。

現今、その樹氷が危機にさらされているという。地球温暖化の影響で、その存在範囲も年々縮小されつつある（『山形新聞』2012年5月18日付）。将来、この冬の風物詩がなくなってしまうとしたら、なんとも残念なことである。蔵王の樹氷をひと目見たいという観光客も多いはずだ。

そういえば、イザベラ・バードが東北・北海道を踏査したのは、1878（明治11）年のこと。そのちょうど一年前に、同国人が「北の国」を訪れ、針葉樹や耐寒性の植物を探しまわっていたことを、はたしてバードは知っていたであろうか。

遠山 茂樹（とおやま・しげき）

宮城県出身。早稲田大学教育学部卒業。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。専門はイギリス中世史。

著書に『森と庭園の英国史』（文春新書）、『中世ヨーロッパを生きる』（共著、東京大学出版会）、翻訳に『プラントハンター東洋を駆ける』、『西洋中世ハープ事典』（いずれも八坂書房）がある。酒田市景観審議会会長。酒田市美術館理事。